

《論 文》

再帰性とグローバリゼーションの理論的検討

—— アンソニー・ギデンズの哲学的保守主義を中心に ——

畑 本 裕 介

1. はじめに

アンソニー・ギデンズの展開する社会理論のキーワードの一つ、おそらくは最も重要なキーワードは再帰性 (reflexivity) である。我が国でも、宮本孝二氏の文献を初めとして (宮本 1998a, 1998b)、ギデンズ理論の概念的分析にはかなりの蓄積があるが、宮本氏が「ギデンズ社会理論の全体像という観点からすると、『行為と構造』、および『歴史と運動』という2つの論点を機軸に構成されている」(宮本1998b: 57) としているように、概念 (社会学原論) と実践的分析 (現代社会論) の連続性については十分な配慮が払われてこなかった。もちろん、これは時代的な制約があり、これまでの社会学理論では、構造・システムと行為の二元論の克服 (池田1991: 141)、もしくはマイクロ・マクロリンクに大きな関心が寄せられていたため、ギデンズ理論のそうした側面に対して専ら焦点があたる傾向があったためであるという理由がある。再帰性概念が、実際の制度や社会の潮流を分析するために利用しやすいように十分に検討され、加工されている研究があるとは言えない。そのため、この概念については、行為の主体性を強調する概念であるとする大雑把な理解が広くありながら、そこから先はどんな含意があるか分からず五里霧中であるといったような状況ですらある。やはり、一定の時間が経過した現代という文脈の中で、再帰性概念をもう一度ま

とめ直し、その効力を確認し直す必要があるだろう。

この論文は、広義の社会保障論の文脈の中での理論的研究に位置づけられる性格のものである。よって、この論文で再帰性概念を検討し直す最終的な目的は、社会保障制度の構造と変動を理解し改革案を提案するための実践的な有用性を概念から引き出すことである。そのため、ここでは、再帰性概念を取り上げるためにさまざまなバランスを考慮し、扱う事例もさまざまな分野に配慮して偏りがないようにするという訳にはいかない。取り上げるのは、ギデンズの研究のうち社会保障制度を扱ったもの、もしくはその隣接領域に関係しているものに偏ったものとなる。論文の有用性を優先すれば間違った方針ではないはずである。しかしながら、他の概念と比較対照し、そもそもどのような現象を示すべく生み出された概念であるのかをできるだけ分かりやすく解説し、社会保障政策以外の分野でも十分に応用が可能となるような説明を試みたい。

また、この論文は、ギデンズの再帰性概念を分析し、実践的分析へと架橋することが主な目的なので、その分析に多くの紙幅を割くことになる。そのため、この概念の視野の中に見えてくる、社会保障政策においてとりわけ重要な意味合いを持つ現象として、ギデンズが精力的に取り組んでいるテーマであるグローバリゼーションの問題を取り上げたい。行論の最後の部分

で、ギデンズの再帰性概念の理論から説明されるものとして、もしくはこの説明を応用したものとして検討したいと思う。この現象を事例として取り上げるにより、再帰性概念の理解はいっそう明確となるであろう。

しかし、こうした最終目標にたどり着く前に、再帰性概念の定義や生み出された経緯を確認したい。第2節で、嗜癖の事例に特に注目しながら再帰性の定義的な確認を行い、第3節で、信頼概念に対する論争に特に注目して彼のエージェンシスの概念と構造化理論を分析することで再帰性概念がギデンズ理論の中で占める位置づけを確認する。以降は、実践的分析への架橋が試みられる部分となる。第4節では、近代の文脈に注目して、時代の進展とともに再帰性が高まっていく様相について考察し、最後の第5節において、グローバリゼーションと再帰性がどのように関連し、再帰性の観点からいかなる分析が可能となるのかを提示したいと思う。

2. 再帰性とは

まずは、再帰性概念とは何か、定義的な確認を行おう。ギデンズの理論的主著である『社会の構成』では、語感から考えて再帰性とは第一に行為者の知ることができる能力 (knowledgeability) を指すものだからといって、「単に『自己意識』 (self-consciousness) としてではなく、現在進行中の社会生活の流れのモニターされた特性として理解すべき」(Giddens 1984 :3) ものとなっている。この一節には様々な内容が要約されているが、これだけではなかなかその含意がつかめるものではない。よって、類似した意味合いを持つ他の概念と比較対照することによって、実際の社会分析にもつ再帰性概念の意義を確認することにしよう。

トニー・フィッツパトリックは、再帰性を「いわゆる再帰性」(reflectiveness) と「反射」

(reflex) の二つに区分している。彼は、reflexivity ではなく reflectiveness の用語がギデンズの理論に関係するものであると述べているので (Fitzpatrick 2005 :57)、用語が混乱するが、これは彼独自の用法と考えてよいであろう。reflectiveness は reflexivity の下位分類であるとされているが、ここでフィッツパトリックの理論を検討するのは、あくまでギデンズの理論を理解する際の参考にしてに過ぎないので、reflectiveness と reflexivity は同じものを指していると考えことにしたい。フィッツパトリックは、ギデンズ以外のその他の論者の理論をも視野に含めた上で再帰性の位置づけを考察しているので、用語系がギデンズのものとはずれてくるのである。

フィッツパトリックによれば、再帰性 (reflexivity / reflectiveness) と反射 (reflex) は、似たような現象を扱うが全く違った事柄を指している。さらに、フィッツパトリックの二つの概念に追加して、「反省」(reflection) を比較対象のリストに加えたい。以上の三つの用語を相互に比較すれば、なおいっそう再帰性の意味合いは明確になるだろう。

我々が「反省」という言葉を用いる時、それがあある行為の結果に対して行われた際に、何かしかの時間が経過した後では、何かより良い結果が生まれるといった意味合いをこめて用いている。反省とは行為の不備に対してなされ、その行為を改善するために行うものだからである。一方で、再帰性という言葉を用いる時、先述の定義のごとく、それは現在進行中の社会生活の流れがモニターされたというだけのことであって、そのモニタリングが展開した先に必ずしも良い結果が生まれるとは限らないし、意識的に結果が必ず統制されるということでもない。モニターされたがために、意図せざる結果 (unintended consequences)、しばしば行為者にと

っては何か悪い意味合いを持つ結果が生まれることもある。すなわち、再帰性とは、反省とは違って、行為の帰結のいかんに関係しないもっと中立的な用語である¹。

嗜癖 (addiction) の事例を見てみよう。ギデنزによれば、近代は行為や制度をモニタリングする再帰性が高まっているので²、自己の継続性を確保することで生活の安心感を満たす存在論的安心 (ontological security) を手に入れるには、絶えず自己を記述し直し自己のあり方を調整していかなければならない。伝統文化のなかでは、「昨日したことを今日もおこなうのが普通であった」(Giddens 1992=1995 : 115) のでこうした機制は必要なかったが、再帰性が制度的なものとなる近代では常に自己の紡ぎだす物語に一貫性を持たせ、矛盾をきたさないように調整・再調整を続け、未来の見通しにも一貫性を持たせる、ギデنزの用法では植民地化する (colonization) ことでやっと安心した社会生活が可能となる。こうして紡ぎだされた自己の物語、もっと広く自己の集合体である制度の同一性は自己アイデンティティ (self-identity) と呼ばれる。

しかし、この機制は必ず上手くいくとは限らない。自己アイデンティティは、常にモニタリングされ再生産されるという性質上、そこには常に失敗の可能性がつきまとうのである。ギデنزの行う説明の中でも有名な嗜癖という失敗事例を取り上げよう。

「社会生活は、すべて相当程度、型にはめられている。われわれが毎日繰り返しており、また、われわれの行動が一因となる規模の大きな制度体を再生産するだけでなく、一人一人の生活に形式をもたらしている活動には一定の様態がある。しかし、こうした型にはまった行いは、一様なものではない。…(そのなかで)嗜癖は、

衝動脅迫的であるが、決して取るに足らぬ儀式ではない。嗜癖は、その人の生活に広範囲に及ぶ影響をもたらしていく。…嗜癖は、衝動脅迫的に没頭する様式化された習慣であり、中断した場合手に負えない不安感を生じさせるものと定義づけできる。嗜癖は、不安感を和らげることで、その人に心の安らぎをもたらすが、こうした安心感はずねに多少とも一時的なものである。」(Giddens 1992=1995 :108-110)

ギデنزによれば、衝動脅迫的な心理状態である嗜癖とは自己アイデンティティの再生産において不具合が生じた状態である。自己と環境との交渉を適切に遂行し、自己の主体性を保持することに成功できている状態から逸脱すれば、その行為者はある型にはまった行いを衝動脅迫的に追求するように追い込まれる可能性がありうる (例えば、酒に溺れたり、セックスに異常な執着を覚えたりなど)。自己の行為のモニタリングが、逸脱した行為の元の状態への修復ではなく、その加速化へ向けて絶えず方向付けがなされるように作動していく場合もありうるのである。

「伝統的秩序の後にくる社会秩序において人びとは、自己についての叙述を、現実には絶えず書き直さなければならないし、また、かりに人が人格的自立を生きるうえでの安心感と結びつけていく必要があるのであれば、ライフスタイルの実践は、そうした自己の記述に沿うものでなければならない。とはいえ、自己実現の過程は、ほとんどの場合、断片的で限定されている。したがって、嗜癖が潜在的に非常に広範囲に及んでいることは、意外でもない。ひとたび制度的再帰性が普段の社会生活のほぼすべての領域に及んでしまえば、ほとんどの行動様式や習慣は、すべて、嗜癖になる可能性があるからである。」

(Giddens 1992=1995 :114-115)

すべての行為者が状況をトータルに把握した上で次の行為を行うのではない限り、この嗜癖の事例のようにある行為が結果として主体的行為の維持を成功に導くのか、はたまた失敗に導くのか、その場では判然としないことがありうる。反省と違って再帰性を働かせると言ったときには、この機制の中立的な性格上、通俗的なイメージとは異なって、意図しない思わしくない状況を導く危うさを抱えている (precarious) のである。

次に、再帰性と反射を比べてみよう。フィッツパトリックによれば、ベックとベッカーゲルンズハイムは、現代はもはや熟慮し社会状況の全体像を精査する時間はないので再帰性は働かないとしている (Fitzpatric 2005 :57)。彼らの主張では、現在の人々は、再帰的に行為をモニタリングせずに、環境からの刺激に即応的に反射するのである。かつて、大衆社会論という学派が隆盛を極めたことがあったが、彼らは現代において同様の状況が発生していると時代分析として診断していると言えよう。「社会生活がスピード・アップし、個人が社会的絆から滑りぬげ自分自身の中心となるなるにつれ個人化が進む」(Fitzpatric 2005 :57) 状況が、人々から再帰性の機会を奪う。こうした状況では「社会生活の流れのモニター」は不可能であると言えよう。確かに、再帰性が働く状況でも、意図せざる、当該行為者にとっては負の帰結をもたらされる可能性があるとはいえ、それは行為者の主体性が発揮されなかったということではない。主体的に意図していたが故の負の帰結なのである。帰結だけに注目すると類似した状況が発生しているように見えても、モニタリングではなく即応である反射と再帰性はまったく違った現象を指し示している。両者のどちらが

現代社会において強く作用しているかを断定するのは難しい。それは、社会分析を行うなかで、どちらの立場がより妥当性のある説明を生み出す場面が多いのかを競った結果、最終的な結論が生まれる類の問題であろう。

以上の考察から、再帰性という概念の、定義を中心とした輪郭を浮かび上がらせてきた。再帰性は、反省と違って行為の言説的統制を保証するものではなく、反射と違って主体的なモニタリングが働いている現象である。次節では、再帰性に注目した社会理論のあり方やその起源を考察し、いっそうこの概念の真髄を明らかなものにしていきたいと思う。

3. 理論的構成 エージェンシと構造化理論

再帰性を働かせた行為のことをギデنزらはエージェンシ (agency) と呼んでいる³。70年代から80年代にかけてのギデنزらは、このエージェンシの契機を、それまで主流であった社会学理論である機能主義的理論の主要概念である「システム」と対比させることで、いわゆる「構造化理論」(theory of structuration) を作り上げたのだった。「言説的な」(Giddens 1984 :5) 合理化を行うという意味のみを強調するいわゆる行為とは違って、この「エージェンシは、個人が所与の行為の継続の中のどの場面においても違った行為が可能であったといった意味で、個人は行為者 (perpetrator) であるといった出来事に関する」(Giddens 1984 :9) ものにすぎない。ここに登場する行為者は、モニタリングは行っているものの、先に挙げた嗜癖の事例のように、必ずしも言説を初めとした手段でその行為を統制できる状態にはない。すなわち再帰性を働かせているだけの状態である。しかし、行為を生産・再生産しているのはエージェント (agent) たる行為者であり、彼を超えて創発したシステムをはじめとする外部

の存在ではないということを確認することに意義がある。

社会学において一時期、創発性を強調する機能主義が流行したのにはそれなりの理由があった⁴。ギデنزによれば、それは次の4点の要因であるという (Giddens 1977=1986 :34-35)。

①自然科学の手法から応用された機能やシステムと言った概念を用いることによって社会科学と自然科学のあいだの論理的統一性があることを示すことができると考えられていた。②社会は部分と部分の相互依存が統合された統一体であり、諸部分が均衡していると信じられていた。③社会システムを分析することによって、ロバート・マートンが顕在的機能と区別された潜在的機能の存在を指摘したように、社会制度の「かくされた目的」を顕現させることができると考えられていた。④保守主義のイデオロギーと結びついていた。④のイデオロギー的な側面に留保をつけるとしても、どれも社会科学的分析にとっては熱望されてしかるべきものであり、さらに、タルコット・パーソンズが「なにものもかつてなしえなかった首尾一貫性と詳細さをそなえ」(Giddens 1977=1986 :26) た理論を展開してからは、社会理論の機能主義的な展開の可能性が現実感を持つこととなった。

しかしながら、ギデنزによれば、それは誤った目的論であり、システムという擬制を実体化したものに過ぎない。この誤りに対しては、機能主義の掲げる社会の目的は人間の目的的行為の限られた部分しか説明していない (Giddens 1977=1986 :35-39) とか、生物生命体の目的を創り出す欲求に当たる対応物が社会には存在しないため目的という言葉が誤って利用されている (Giddens 1977=1986 :39-43) といった説明もなされるが、最も重要なのは「システム」と「構造」の概念を取り違えているというものである。構造には、生産・再生産

すると同時に生産・再生産されるという「構造の二重性」があるために両者はまったく異なった概念なのである (Giddens 1977=1986 :50)。システムと構造の違いを明白なものにするために、構造の結晶体である様々な社会制度が生産・再生産されるメカニズムについてのギデنزの説明を参照してみよう。

ギデنزは、マイクロ・マクロリンクについての論文集に寄せた論文の中で (Giddens 1981 :161-174)、アービン・ゴフマンとマートンの社会学理論を取り上げている。その論文によると、前者は、相互作用が組織されていく過程について関心を示すものの制度・構造への視点が欠けている。また、後者は、「潜在的機能」に注目した分析を行うのであるが、それでは「顕在的機能」はいったい何のために存在するのか不明であると批判される。すなわち、マートンの分析では顕在的機能と命名された当事者にとっての合理性には何の役割も付与されないままなのである。

ギデنزは、社会的に編成された様々なレベルの行為パターンである構造は行為の前提であり、行為はその前提なしには成り立たないことを確認する。しかしながら、構造はたんなる永遠の (merely "eternal") 固定的な存在ではない。それは、行為者によって常に再生産されることによってのみ成り立っているものなのである。例えば、社会的に編成された構造としての言語の文法は、行為者が発話行為の際に参照するものであるが、参照するまでは実際の役割を果たさない存在でもある。つまり、実際に文法が存在すると言えるのは、行為者が発話行為の際に文法的な文章を構成するときだけである。そして、文法的な発話行為を行為者が繰り返すことによって、その文法はますます強固に再生産される。もちろん行為者がまったく文法を参照しなくなれば、その文法は消えてなくなっ

しまうのである。

かくして、構造は行為者にとっては「資源 (resource)」⁵ としての存在であることが認識される。構造はそのままで成り立っているのではなく、行為者に利用されることによって初めて存在を始めるものなのであるから、それは行為に無関係に実在するのではなく、行為を可能にする資源として利用されてはじめて存在を始めるものである。また、行為は、フリーハンドな自由をもつものではなく、発話行為における文法のように、何らかの前提となる構造が資源として利用されてはじめて可能なものである。ギデنزの構造化理論の中にこのように構造は位置付けられることになる。さらに、こうしたギデنزの理論的考察によれば、再生産され、ある時間と空間に位置付けられた結果としての関係、たまたまそのときその場に現れてきたに過ぎないパターン（たまたまそのようにというだけで何ら固定的なものではない）が、「システム」である。

ギデنزは、「システム」の実体化、すなわち創発特性の実在性をできるだけ避けるような論理を展開する。それは、ギデنزの理論には、人間の主体的行為のダイナミズムを確固たるものとして位置付け、「システム」という神学的な響きすら伴う概念の幻想を振り払おうという意図が働いているからである。先のマートンの理論では、潜在的機能がこのシステムにあたる。これは観察者がいわば恣意的に想定しただけに過ぎないものであり、実体として行為を超えて存在している訳ではない。

以上のような思考法は、「信頼」(trust) 概念に対する彼の発想にも反映し、システム論の泰斗であるニクラス・ルーマンの信頼概念を、システムとして信頼概念を実体化して捉えていると批判する。

ルーマンは、信頼を人格的信頼とシステム信

頼に厳格に区別し (Luhmann 1973=1990)、後者は、前者である特定のパーソンに対する信頼とは違って、システムが蓄積していく機能作用を信頼することによって一般化されたコミュニケーションが可能となり、いっそう複雑な問題処理を可能とするものであると主張している。ルーマンの扱う事例からは離れるが、例えば、商取引における信頼をトラスト (いわゆる信頼) とクレジット (信用) に区分していることが挙げられるだろう。対面的な関係から生まれその場その場でのアドホックな調整が可能なトラストに対して、個々人の手を離れ固定した取引関係の基盤として利用可能なクレジットとして二つの信頼概念を使い分けている。このクレジットがシステム信頼にあたるものである。

しかし、ギデنزによれば、こうした区分は仮構に過ぎない。確かに、ギデنزも「抽象的システム」という概念を用意して (Giddens 1991=2005 :24-25)、ルーマンのシステム信頼のような作用が発生していることを自分の理論の中に組み込もうとする。しかしながら、この抽象的システムすら人格的なやり取りの中で調整ができないものではない。「抽象的システムの非人格性を私生活の有す親密な関係性と対比することは、明らかに間違いである。私生活とそれにとまなう社会的きずなは、最も遠方に存在する抽象的システムとも深く関わり合っているからである」(Giddens 1990=1993 :150)。例えば、1997年にタイから始まったアジア通貨危機の事例を考えてみるだけでよいだろう。ヘッジファンドによる空売りという極めて個人的な決定と調整により、通貨の信頼性 (システム信頼) は大きく揺らいだ。その前にも、1992年のポンド危機があったように、これは例外的な事例ではない。人格的信頼とシステム信頼を区別することにより後者が完全分立・自己準拠するかのようイメージを提示するならば、それ

は明らかな間違いと言わざるを得ないであろう。人格的信頼もシステム信頼もいわば程度の違いであり、両者に本質的な違いなど存在しない。システムの実体性を強調するルーマンのシステム論のその後の展開を考えた時、こうした批判は杞憂に過ぎないことでは決してないと言わざるを得ない。

では、システムの実体化を避け、エージェントの重要性を強調する構造化理論とはいかなる理論であろうか。最後にその概略を示したい。構造化理論には、構造、システム、構造化といった三つの契機がある (Giddens 1984 :25)。構造とは行為を生産するための資源 (生成的規則を含む) である。この資源を利用して、行為が生産される。行為の生産は構造へとフィードバックされ、構造が再生産される。このプロセスが構造化である。構造という資源は個々の行為者が個別に所有するものではなく、集団としての特性である。その限りで、構造は共有された何らかのパターンとなる。こうして現れたアドホックなパターンがシステムとして現前してくるわけである。よって、システムとは何ら実体のあるものではなく、エージェントの中で絶えず生産・再生産される場合においてのみ存続可能となるものに過ぎない。

「構造の二重性をとおして、たえず生産、再生産されるかぎり社会システムは存在するわけであるが、一方、構造化のこのような過程に影響をあたえる条件は、『非人格的』な結合として分析することができる。しかし、このような結合を確立する一般化は行為の合理化という変化していく範囲からみると、本質的に不安定である。」 (Giddens 1977=1986 :69)

以上に、再帰性概念を利用して構築された社会理論である構造化理論の概略を示した。構造

化は時間・空間を超えて存在する普遍的な現象であるが、ギデンズによれば、この構造化において作用する契機としての再帰性が近代においては前近代よりも高まっているのだという。それはいかなる事態であるのかを次に見ていくこととしよう。

4. 再帰性の展開とは 近代=暴走する世界

ギデンズは、近代は特に再帰性が高まり、極端なダイナミズムのある社会、すなわち暴走する世界 (runaway world) になったとしている。次の3点において、近代は前近代とはまったく違ったスピードで変化を続けることとなるからである。すなわち、①時間と空間の分離 (time-space distanciation)、②脱埋め込み (deembedding) メカニズム、③制度的再帰性である (Giddens 1991=2005 :22)。

①は、前近代の時間・空間の密接な関係が次第に分離していくことを指し示している。機械時計の発明と世界中に及んだ暦の標準化のために (Giddens 1990=1993 :31-2)、伝統的な前近代の社会では空間と結合させることにより示されていた時間は空間に対して独立したものとして再組織化され、空白化 (emptying) される。伝統的な社会では、農耕のために設計された暦が利用されることで、時間は農地としての空間から切り離すことができなかった。暦は、年中行事などを通して人間関係の基本ともなるから、人々は時間と空間が混濁したままの世界に閉じ込められて生活していることとなる。しかし、時計は、目の前の土地を離れて出来事が進行していくことを人々に伝える。目の前の土地と時間が切り離され、時間は時間として独立し、中身を持たないようになる。これは空白化と呼ばれる。さらに、この時間の空白化は空間の空白化へとつながる。時間的に同時な目の前の活動から解放された空間は時間に言及するこ

となく再帰的に再編成されていく。こうして互いに対して空白化された時間と空間は、それぞれを新たに再結合しまったく新しい編成を作り出す余地を生む。かくして、近代では、時間と空間の再結合を求める再帰的なダイナミズムが生まれるのである。

例えば、空白化された時間を使って、定期的に予定を組みなおすことができるようになり、組織運営は効率化される。これは時間が独立したものとして使えるようになったからこそその利便性であろう。かくして、次々と制度や組織は作りかえられるようになっていく。

②の脱埋め込みメカニズムとは、象徴的通標 (symbolic tokens) (貨幣などの標準化された交換媒体) と専門家システム (expert system) を合わせた抽象的システム (abstract system) の発生が、時間と空間の再帰的な分離をさらに加速していくことである。抽象的システムは、相互行為の場所を特定しなくなる。例えば、専門家の持つ知識は、特定の土地の特定の人物のための知識ではなく、専門家とそのクライアントが誰であれ利用できるものである。普遍的に通用する知識を用いて、人々は初対面の人とでもコミュニケーションを取り、生活全般の用をたすことができるようになるのであり、再帰的に時間と空間を越えることがより容易になっていくのである。

③は、例えば科学の発達などにより、人々が「社会的活動や自然との物的関係の大抵の側面に対して疑い深くなり、慢性的に新しい情報や知識に照らした修正を繰り返していく」(Giddens 1991=2005: 22) ようになることを指している。つまり、近代とは疑うということ (doubt) の制度化なのである。疑って作り直すという作用を繰り返すことで、これまた近代特有のダイナミズムが生み出されていく。

以上のような特徴を備えた近代は、つまると

ころグローバル化を志向する。時間と空間は加速度的なスピードで分離していき、国境線を超え、ついには地球上全ての地域が結ばれるようになる。これは、移動・通信手段が発達するというだけのことではなく、日常生活の隅々にまで、世界中の出来事が影響するようになったということである。ギデنزによれば、近代の三つの特性が徹底された結果グローバリゼーションが発生する。それ以前の近代を前期近代とすれば、それとは違った社会的様相が顕れてきたのが後期近代すなわちハイ・モダニティである。ハイ・モダニティの時代では、伝統的な社会を疑ってきた近代というあり方自体が疑いの対象になったのであり、近代を疑うための制度的条件が整ってきたということである。

5. 再帰性とグローバリゼーション

再帰性が徹底された近代では、グローバリゼーションが避け得ない事態となる。次に、ギデنزの思考を参考にしつつ、そのグローバリゼーションなるものを持つ影響はいかなるものであるのかを確認する作業に入りたい。

グローバリゼーションとは『『みなが同じ世界に住むようになった』という現状認識をいいあらわす』(Giddens 1999=2001 :22) 言葉である。前節での説明のごとく、再帰性の高まりは力強いダイナミズムを生み出し、様々な活動が国境線を超えていく。そのため、多くのそうした活動や制度が土地から離れて世界中で共通化されていくこととなる。現在では、このグローバリゼーションは、欧米化を意味すると受け取られることもあるが、ギデنزによれば、「欧米支配と決めつけるべきではない」(Giddens 1999=2001 :39)。この現象は決して先進国支配の一方向的な現象ではなく、「欧米諸国にとってもまた、他の地域同様、グローバリゼーションのおよぼす影響は不可抗力なので

ある」(Giddens 1999=2001 :40)。では、何ゆえにこうした主張が、正当性をもつのであろうか。

確かに、グローバリゼーションに対しては二つの立場が存在する。ギデンズによれば、それは「懐疑論者」(skeptics)と「ラディカルズ」(radicals)である。後者は、ギデンズの立場であり⁶、グローバリゼーションが現実であるのは当然として、経済のみならず政治・技術・文化にもその影響は及んでいると考える。しかし、前者によれば、グローバリゼーションと呼ばれる現象は戯言に過ぎず、現在の経済社会はこれまで長年にわたり築き上げられてきたものと何等変わるところはない。そうであるのに、ことさらグローバリゼーションを強調する「世界観は、福祉国家の解体と財政支出の削減を企図する、市場主義者のイデオロギーにはかならない。現に起きたことはなにかといえ、それは一世紀前の世界への逆もどりにすぎない」(Giddens 1999=2001 :25)と考えるのが彼らの思考法である⁷。

しかし、ギデンズが言うところのラディカルズは、公共性を破壊し世界の欧米化をもくろむ単なる市場主義者ではない。市場主義では、経済的強者が都合のよいように社会のあらゆる領域を再編し、資本の論理にすべてを従えていく。つまり、有無を言わさぬ社会の効率化・合理化への圧力が、日常生活から福祉国家の歴史が築き上げてきた諸制度までを単一の優勝劣敗の論理に統合しようと激変させていく。

ギデンズは、確かに、グローバリゼーションによって破壊される立場にある「伝統」には辛らつな面がある。

「伝統的な流儀で伝統が生きながらえることはますますむずかしくなる。ここでいう伝統的な流儀とは、儀式性や象徴性を盾にして伝統的し

きたりを守ること、すなわち、伝統が『真理』であることを盾にして伝統を守ることが意味する。」(Giddens 1999=2001 :91)

この言葉だけを見れば、ギデンズは伝統に対する根源的な批判者であり、社会の抜本的な破壊と再創造の強力な推進者に過ぎないように見えるであろう。

しかしながら、その一方で、ギデンズは自らの立場を「哲学的保守主義」(philosophic conservatism)であるとも言うのである⁸。この立場は「非完全性と折り合って生きるという観念」(Giddens 1994=2002 :23)を意味する。造り出されたリスクとの対決に際しては、過去の革命的理想主義を、すなわち「『前と同じ』かたちをとれないことを、つまり、現在なり過去を犠牲にして際限なく未来を探求するかたちをとれないことを、認識」(Giddens 1994=2002 :23)するものである。もちろん、この立場は、慣習や儀礼、象徴をよりどころにした超越性を根拠にした権力を擁護するものではない。しかし、伝統は、民主的な市民社会を維持するのに重要性を持つことも認識すべきである。

「伝統が連帯性の一般化できる源泉となる限り、救済されたり、再生される必要がある。もっと広い社会的価値に役立つために守られる伝統は、それでもなお伝統であろうか。そうであるとも言えるし、そうでないとも言える…。伝統の救済とは、かりにそうしなければ失われてしまう過去との連続性を維持し、同時にまた未来との連続性を獲得する方法として過去との連続性を維持することを意味している。」(Giddens 1994=2002 :69)

ギデンズの立場であるラディカルな政治は、伝統を無視して究極の理想を求めることなどで

はない。むしろ、伝統を前提に社会の再編を求めるからこそ、社会変革が可能となると考える立場である。人々が再帰性を働かせるのは、前提となる社会的資源を利用してのことであり、フリーハンドな自由を手にして社会を組み替えていくわけではなかった。グローバリゼーションの影響下にある人々は、確かに伝統に従順に従うのではないかもしれないが、伝統を無視して新たな論理のもとに社会を蹂躪しようとするのではない。あくまで、これまでの社会生活から生み出されてきた社会的資源を再帰的に利用することで、既存のパターンに修正を加えていくに過ぎない。こうした立場をギデنزが採るのは、彼の再帰性の理論からは必然であろう。資源としての社会的制度や規則をモニタリングすることで社会は変動させられる。ここで行われるのはモニタリングだけであり、前提となる資源の有様に修正を加えることができるのみである。

このことを確認した上で、「伝統のもつ権威が何に由来するか」(Giddens 1994=2002 :67)を哲学的に探求して、伝統の持つ権力との結びつきの危険を見通し、資源としての有用性を確認していく立場が哲学的保守主義である⁹。

グローバリゼーションにおいても、事情はまったく同じである。欧米諸国が、それ以外の地域を支配しようと自らの論理を意図的・計画的に押し付けることができるわけではない。様々な活動が国境線を超えとはいえ、ある地域での影響はその地域の資源の改変という形を取るものであり、更地にフリーハンドで論理を書き込むのではない。また、グローバリゼーションは、再帰性の意図せざる結果として欧米諸国をも巻き込み、負の結果をもたらすこともある。ギデنز「逆植民地化」¹⁰(Giddens 1999=2001 :40)をその事例として取り上げている。

逆に、社会のそれぞれの地域が固有の論理を

持ち、グローバリゼーションを受け入れた地域とそうでない地域があるかのようなイメージを提示するのも誤りであろう。グローバリゼーションは一方的な欧米支配ではないが、どの地域においても不可避な傾向である。例えば、福祉国家再編の現状に対するギデنزの分析を見てみよう。1990年代の後半には各国に社会民主主義政権が誕生したが、それぞれの国情に応じてその政権のスタンスは大きく異なり、すべて同じ社会民主主義政党的の政権と断言するにはいかないほどであった。ギデنزは、社会民主主義政権を四つに分類している(Giddens 2002: 4)。イギリスのニュー・レイバーモデル、オランダの干拓地モデル、スウェーデンの改良福祉国家路線、フランスの国家統制主義路線である。しかし、四つのうち、市場経済に適応した改革主義的な傾向が最も少ないとされるフランスでも、「伝統的な方針をそのままにしておく手段を発見したのかといえばそうではない」(Giddens 2002: 5)。1980年代にはケインズ的な経済政策は放棄されたし、ジョスパン政権の下でもいっそうの民営化が進められた。また、2002年時点でも失業率はイギリスよりも高い9%台であり、グローバリゼーションに対応して労働条件を改定することは必須のことであろう(Giddens 2002: 5)。とりわけフランスの若年失業率が高いのは有名であり、最近では2年までは理由を示さず解雇が可能な制度であるCPEが提案されるなど¹¹、労働条件への改変圧力は高まり続けている。

より市場の効率性を重視するイギリスの労働党政権に対して、国家による介入を重視し公正さに重きをなすフランスの社会党政権ではまったく対応が違っていたように見える。若年者失業対策に対しても、労働党は教育・訓練を重視するサプライサイドを重視したのに対して、社会党は国家の資金で雇用ポストの創出を行うデ

マンドサイドを重視していると言われている(白川 2005: 64, 73)。では、労働党は左翼の伝統を捨て去ったのか。そうではなく、「労働党は独断的に左翼の伝統を放棄しているのではなく、あらゆる国が直面している構造変動に反応しているのである」(Giddens 2002: 5)。再帰的に編成されていく社会では、理想的ではあっても固定的な制度など存在しない。よって、アンチ・グローバリゼーションとしてある国の制度を設定することで対立軸を打ち出すことには疑問が残るのである。グローバリゼーションへの認識を適切なものとするには、再帰性の理論をもって現状を適切に評価し、その動向を見極めなければならない。

6. おわりに

この論文では、ギデンズの再帰性概念について理論的に検討し、概念の帰結としてグローバリゼーション認識に付与された方向性が決まってくるということを示した。ギデンズの社会理論における概念の構築とその実践への意味合いをある程度まとまった形で提示できたのではないかと思う。

1997年にイギリス労働党が政権を取る前の準備期間にあたる1990年代に、ギデンズは労働党の政策への具体的提案を精力的に行っていた。1994年の『右派左派を超えて』はその典型であろう。こうした提案は、内容が具体性を持っているために、この時期のギデンズとそれ以前のギデンズの連続性はなかなか見えづらいものだったと言ってよいであろう。そのため、この論文のように概念と実践への提案がいかに架橋されているかを考察する必要があったわけである。筆者が所属する社会政策分野の研究者のみならず、様々な理論的・実証的分野の研究者が、ここで示された概念道具 (conceptual tool) をご利用になるお役に立てれば幸いである。

【参考文献】

- Callinicos, A.T., 2001, *Against the Third Way*, Polity Press Ltd. = 中谷義和監訳『第三の道を超えて』日本経済評論社、2003年
- Diamond, P.&A.Giddens, 2005, "The new egalitarianism : economic inequality in the UK" in Giddens, A. & P. Diamond (eds.), *The New Egalitarianism*, Polity Press : pp.101-119
- Fitzpatric, T., 2005, *New Theories of Welfare*, Palgrave.
- Giddens, A., 1977, *Studies in Social and Political Theory*, Hutchinson = 宮島喬他訳『社会理論の現代像 デュルケム、ウェーバー、解釈学、エスノメソドロジー』みすず書房、1986年
- , 1981, "Agency, institution, and time-space analysis" in Knorr-Cetina, K. & A.V. Cicourel (eds.), *Advances in social theory and methodology*, Routledge & Kegan Paul Ltd, pp.161-174
- , 1984, *The Constitution of Society*, Polity Press
- , 1991, *Modernity and Self-Identity Self and Society in the Late Modern Age*, Blackwell Publishing = 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ 後期近代における自己と社会』ハーベスト社、2005年
- , 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Polity Press = 松尾精文・松川昭子訳「親密性の変容——近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム——」而立書房、1995年
- , 1994, *Beyond Left and Right: Future of Radical Politics*, Polity Press =

- 松尾精文・立松隆介訳『左派右派を超えて ラ
ディカルな政治の未来像』而立書房、2002年
- , 1998, *The Third Way*, Polity Press
= 佐和隆光訳『第3の道——効率と公正の新
たな同盟』日本経済新聞社、1999年
- , 1999, *RUNAWAY WORLD*, Profile
Books, Ltd. = 佐和隆光『暴走する世界 グ
ローバリゼーションは何をどう変えるのか』ダ
イヤモンド社、2001年
- , 2000, *The Third Way and its Crit-*
ics, Polity Press = 今枝法之・干川剛史訳
『第三の道とその批判』晃洋書房、2003年
- , 2002, *Where Now for New*
Labour?, Fabian Society
- Diamond, P., & A. Giddens, 2005, "The new
egalitarianism: economic inequality in the
UK", in A. Giddens & P. Diamond (eds.),
2005, *The New Egalitarianism*, Polity
Press: 101-119
- 畑本裕介, 2002, 「ミクロ・マクロリンクの固有
の困難——バランシング・デバイスとしての社
会学へ向けて」『法学政治学論及』第54号(秋
季号): 85-118
- , 2004, 「ブレア第三の道の社会政策と
その批判——コミュニティの重視へ」『社会政
策研究』4(東信堂): 205-225
- , 2006, 「福祉国家とコミュニティ概念
——コミュニタリアンの立場から」『社会政
策研究』6(東信堂): 184-204
- 池田信, 1991, 「行動と構造との統一的把握につ
いての一考察——ギデンズの構造作用論につ
いて——」『経済学論究』45(2)(関西学院大学経
済学部研究会): 141-161
- Luhmann, N., 1973, *Vertrauen ein*
Mechanismus der Reduktion, Ferdinand
Enke Verlag = 大庭健・正村俊之訳『信頼
社会的な複雑性の縮減メカニズム』勁草書房、

- 1990年
- 宮本孝二, 1998a, 『ギデンズの社会理論』八千代
出版
- , 1998b, 「構造主義、ポスト構造主義と
社会理論——ギデンズ理論の紹介と検討」『桃
山学院大学社会学論集』第32巻第1号: 47-73
- 白川一郎, 2005, 『日本のニート・世界のフリータ
ー欧米の経験に学ぶ』中公新書ラクレ197

【註】

- 1 行為の帰結に対する統制の欠如を説明するた
めに、ギデンズは、意識を三つのレベルに分け
ている。すなわち、行為者の意図として認識さ
れるが、言語と関連させられる「言説的意識」
(discursive consciousness)、言語化されない
「実践的意識」(practical consciousness)、行
為者の意図として認識されず通常は抑圧されな
がらも行為に影響を及ぼす身体の「無意識」
(the unconscious) である (Giddens 1984 :7)。
三つの層に精神現象を区分することにより、ギ
デンズのいうところの「主体性」と意識による
結果の支配を明確に区分している。
- 2 この点に関しては後述。
- 3 エージェンシは主体的行為と日本語訳される
ことも多かった。しかし、主体的行為では、か
つての実存主義的な主体性の理論を想起させて
しまう。両者の違いはこれから明らかにしてい
くが、両者は類似するどころか後者の否定が前
者が生み出された理由の一つでもある。よって、
ここでは混乱を避けるために、カタカナ表記で
エージェンシとしたいと思う。
- 4 社会理論においては創発性を認めるか否かを
巡って二つの立場が対立する。筆者も以前この
対立に関する論考を展開した(畑本 2002)。
- 5 ギデンズの用語法では、生成的規則 (gen-
erative rules) と 資源 (resources) は区別
される。このような区別の中で、資源の用語法

は、意味論的であったり道徳的であったりする規則の範疇に入らない「行為者が社会的相互作用の過程において自分たちの目的の達成を容易にする（物質的あるいはそれ以外の）いっさいの所有物、それゆえおよそ権力の行使のための媒体として役立つもの、を意味している」（Giddens, A., 1977 = 1986 :50）。しかしながら、この論文では、ギデنزが構造的「拘束」を行為者の利用の対象である「資源」へと読み替える作用に注目する点にもっぱら焦点をあわせるため、あえて生成的規則と資源の両方を包含するものとして「資源」の用語法を用いていくこととする。

6 ギデنز「私自身はラディカルズを支持する」（Giddens 1999=2001 :26）と断言している。

7 アレックス・カリニコフは、ラディカルズの主張を批判する。カリニコフによれば、歴代労働党政権の「歴史からすると、グローバル化のなかで全く新しい経済的制約が政府活動に課せられることになったとする考えは疑問視せざるをえないことになる。今よりも金融市場が厳しく規制されていたときでさえ（イギリスの為替管理が廃止されたのは一九七九年のサッチャー政権下においてのことである）、労働党政府は国際的資本逃避によって路線の変更を余儀なくされている」（Callinicos 2001=2003: 46）。資本流出が問題となったのは、現在のグローバリゼーション特有の現象ではなく、いつでも起こっていたことである。それは現在のブレア政権だけではなく、マクドナルド第二期政権でもウィルソン-キャラハン政権においても経験されていたのである。なるほど、この指摘は正しい。しかしながら、ギデنز、グローバリゼーションは近代における再帰性の高まりの帰結であると考えているのであり、現代において突如として現れた現象であると考えている訳では

ないことを確認しておく必要がある。

8 ギデنزのいう保守主義は守旧派としての保守主義とは異なっている。「哲学的保守主義は、きわめて枢要な思想的立場である。通説に従えば、近代化と保守主義は無論相反する。しかし、リスクと責任の関わりのある方が様変わりした、『伝統を超えた』、『自然の対極にある』世界を何とか生き抜くには、近代化のツールに頼らざるを得ないのである。／ここで言うところの『保守主義』は、政治的右派を保守主義と言うときのそれとは、似て非なるものである。変化へのプラグマティックな対応を意味する保守主義である。科学技術の功罪をわきまえた上で科学技術を相対視する視点、過去と歴史の尊重、可能な限り予防原則にそくしての環境問題への対処等々。これらの目標は、近代化のアジェンダに抵触しないばかりか、近代化をその前提に据えているのである。」（Giddens1998=1999: 120）

9 かつてギデنز、コミュニティを強調することは排他主義的になる危険性があるとして批判していた（Giddens 2000=2003: 73）。しかし、近年ギデنز、社会の多様性と連帯にはトレードオフの関係があるために後者にも注目し直さなければならないと述べている。さらに、「強力な福祉国家に必要な社会的連帯を維持するために、ナショナル・アイデンティティの諸形態を構築する必要がある」（Diamond & Giddens 2005: 107）とまで踏み込んでいる。筆者は、福祉国家を維持するためにはコミュニティの連帯を回復する必要があるとした主張を展開したが（畑本2004, 2006）、ギデنزの主張も同じ展開を見せている。

10 「逆植民地化とは、欧米諸国の経済に対して、発展途上国が影響力を発揮することをいう。ロサンジェルス、ラテン・アメリカ化、インドのハイテク産業の世界市場への進出、ブラジルの

テレビ番組のポルトガルへの輸出など、例をあげだせばきりが無い。」(Giddens 1999=2001:40)

- 11 幸いなことに2006年12月現在この法案は成立 (はたもと ゆうすけ、本学科講師・実習指導員)